

出藍文庫
1-1

「東方文様讀本」
東方キャラに使われる文様の意味と由来

近藤貴弥 文・編
うーみん 画

序 近藤貴弥

本書は表題にある通り『東方キャラに使われる文様の意味と由来』を、うーみん氏の画と共に書いていく書である。東方Projectに登場するキャラクターや東方に関する考察本は沢山出ている。この書は、東方に使われる『文様』に注目し、一つ一つを考え、そのキャラクターをより深く理解できるような本を目指している。そのため、立ち絵のないキャラクターについては、文様が分からないため省略する。また、旧作も確認が難しいため省略している。

文様と模様の違いについては、様式化された連続模様のことを文様とし、ワンポイントとして描かれているようなものは模様とする。たとえば、十六夜咲夜やレミリア・スカーレットの襟元に描かれているラインやサニーミルクの服に描かれている太陽マークは模様と考え、区別している。この書は『文様』の意味と由来に注目するため、そのような模様しか描かれていないキャラクターは省略している。

本書の構成は左記の通りである。

- ・見開き右の頁に文様の意味と由来についての文章。この文章は基本的に頭部や帽子から始まり、どんどんと爪先や指先へと展開される。
- ・見開き左の頁に、うーみん氏の画による説明。

目次

稗田阿求……………三八

序……………三

後書き……………四十

博麗霊夢……………八

霧雨魔理沙……………十

紅美鈴……………十二

十六夜咲夜……………十四

レミリア・スカーレット……………十六

西行寺幽々子……………十八

八雲紫……………二十

八意永琳……………二十二

蓬莱山輝夜……………二十四

星熊勇儀……………二十六

古明地さとり……………二十八

古明地こいし……………三十

姫海棠はたて……………三二

秦ころも……………三四

少名針妙丸……………三六

東方文様讀本

彼女の文様となると、頭のリボンや衿やスカートの裾に用いられているものであろう。これは縞模様的一種である山路文と考えられる。山道とも呼ばれ、ギザギザ形の線で構成された文様である。あるいは、鋸の歯のような形か鋸歯文と呼ばれる文様の可能性もある。

筆者は、博麗靈夢に用いられている文様は山路文だと推測している。その理由を以下に展開させる。まず靈夢が博麗神社の巫女であるところが、山路文について考えていきたい。博麗神社は幻想郷の最東に位置し、神社から幻想郷を一望できると『東方求聞史紀』にある。一望できるということはある程度の標高があるということの意味する。『風神録』で登場した守矢神社が「山の上の神社」との対比として、博麗神社は「麓の神社」とされていることから、妖怪の山ほど高くないということが分かる。その博麗神社まで至る道筋の一つとして、山路として表現されているのではないかと考えた。

が、同じ巫女である東風谷早苗にはそのような文様は見当たらない。加えて、ここで山路文のギザギザの頂点に規則的に並んでいる円があることを思い出してほしい。

先の筆者の推測では、この円の説明までカバーしているとは到底考えられない。博麗神社に至る道筋ではなく、もつと博麗靈夢に近いのではないだろうか。

すなわち、靈夢が武器として使う陰陽玉との関係である。一般的に太極図と呼ばれるこのマークは、物事の性質を陰と陽に分ける。その中に太陰と太陽があり、月と太陽の関係である。ギザギザの頂点に規則的に並んだ円を今再び見てみると、太陽や月が昇り、沈む様子の簡略表現と呼べるのではないだろうか。つまり、山に太陽が昇り、沈み、月が昇り、沈み、また太陽が昇ってくる。そのような自然の摂理を文様として靈夢に用いたのではないだろうか。



博麗霊宝

山路文

霧雨魔理沙の文様は意外に少なく、無地であることが多い。飾り物として星が用いられている程度だ。しかし、『紺珠伝』を見てみると、帽子等々に微かであるが丸い模様が描かれているのが確認できる。点も文様の一つとして鮫小紋や霰小紋といった細かい点を衣全体に散りばめたものとして存在しているが、この場合は数が少なく、そのような文様には見えない。幾何学模様にしても同様である。

ここで、帽子に配置されている丸い模様の並びに注目したい。傾いてはいるが、『品』の字に並んでいる。中国では、このように『品』の字に三つの丸を並べることを、三曜文と呼んでいる。オリオン座の中央に並ぶ三つの星のことを三武といい、中央の大將軍星、左右の左將軍星・右將軍星として、武神の象徴としている。

星が文様として用いられたのは古く、鎌倉時代の絵巻物『平治物語絵巻』に登場している。古代中国の陰陽説が五行説が平安時代に盛んになった。北斗七星を神格化した妙見信仰も起り、星の文様化が進んだ。

三曜として用いられているオリオン座であるが、星座

の元となっているギリシャ神話に登場するオリオンであるが、ここで『紺珠伝』と関係がありそうなものを一つ挙げておく。

狩猟の女神でもあり、後に月の女神となったアルテミスと恋に落ちたオリオンの話である。アルテミスの兄であるアポロンは、二人を引き離そうと企て、アルテミスに弓を引かせ、オリオンを殺した。

このような下地を考えると、『紺珠伝』に登場する魔理沙の帽子に三曜が使われているのは、偶然ではないと考えられる。

三曜文

霧雨魔理沙



スカートや胸のあたりに、何か模様が描かれているのが確認できる。これは中国の伝統的な幾何学模様である雷文らいもんである。名前の通り、雷や稲妻を意匠化し、曲折した直線で表した文様。この文様は殷や周の時代から使われていた文様であるが、現在のように中心に使われるのではなく、龍や鳳凰の動物文様の端に隙間なく施された。古代中国では文様は邪霊から中身を守る力があると考えられていたからである。

日本に伝わったのは、奈良時代に仏教と共に大陸文化が輸入された頃に取り入れられた。江戸時代でも脳装束によく使われ、荒々しい役割を表した。この文様を卍字に崩し、織物の地模様として使われることもある。

美鈴の文様に注目すると、雷文様が二つ繋がっているところと一つしか繋がっていないところがあるが、中国式が前者であり、日本式が後者である。

意匠化された雷であるが、稲光を思わせるようなギザギザ状に屈折した幾何文様もある。



紅菱鈴

メイドという立場からか、彼女に施されている文様は少ない。『輝針城』で、スカートの裾部分に施されているのが確認できる程度だ。この文様を見た時、この文様がレースなのか、他の文様なのかということが考えられる。

レースは十六世紀の北イタリアで盛んになり、十七世紀中期にはフランスでも大流行した。襟や袖口、ハンカチの縁などに使われ、威厳を表すにも欠かせないものとなった。レースは次第に男性にも多く使用され、目が詰まった厚みのあるレースが優れているとされるようになった。十八世紀に入ると時代の嗜好に合わせ、レースも軽やかで洗練されたものとなる。華々しい時代と共にその姿を巧みに変えたレースであったが、十九世紀後半になると豪華な装飾から、実際の衣類、ギリシヤやローマ時代のような流れるようなシルエツトが好まれ、レースは次第に需要を失い、徐々に廃れていくこととなった。もう一つは、葉文様である。切り込みの数によって、三葉、四葉、五葉、多葉となる。裾に用いられている文様は切り込みの数から、三葉に見えないこともない。三

葉は、三位一体を表す。

と二つの文様の可能性を考えたが、葉文様は建築装飾であるため、服飾に使われるとは考えにくい。ゴシック建築のアーチは窓の先端部分を飾っている装飾である。

外の世界で忘れ去られたものが幻想郷に流れ着くとすれば、レースという文様が外の世界で忘れ去られ、幻想郷の少女達の服飾に使われるようになったと考える方が妥当なのかもしれない。

十六夜

鈴



襟を見ると、三つの円が「品」の字形に並べられたものがある。魔理沙の頁（十二頁）でその文様の意味は大方説明しているが、その文様は登場作品である『紺珠伝』に則して考えるようにしていた。その説明を、そのままレミリア・スカーレットに当てはめると食い違ふところが生じるであろう。ここでは、今一度、その文様について考えてみる。

この文様は先に書いている通り、オリオン座の帯にあたる三つの星を円で表現したものである。いわゆる、三つ星と呼ばれるものだ。オリオン座という星座が、いつ見えるのかとなると、冬、宵の時分である。宵、夜中、暁と徐々に夜が深くなる、その最初の時分である。

狩人であるオリオンの星座を施しているのも、レミリア・スカーレットを知る上でも役立つことであろう。

袖を見てみると、十六夜咲夜の頁（二二頁）で説明したレースが施されていることに気付く。華やかな少女性を思わせながら、威厳を示すものとして使われているのだろう。

『紅魔郷』のみに見えるが、服の中心に「S」字状の

留め具が見える。ヨーロッパの文様のルーツにケルトがある。そのケルトの特徴的な文様の中に組紐文がある。始まりも終りもない連続文であり、無限や永遠を象徴するものとして考えられてきた。この文様が上へ下にと重なり合う動きの繰り返しは、死と誕生を繰り返すケルトの霊魂不滅の思想に通じる。「永遠に紅い幼き月」という二つを示す彼女らしい装飾ではないだろうか。



『妖々夢』の西行寺幽々子の衣類に注目すると桜花が描かれているのが見える。桜は平安時代に貴族達に愛好され、それまでの「花」といえば「梅」というイメージを逆転させた。花が散る風情と共に、流水の流れに任せ桜の花も日本人の心をとらえ多くデザインとして使われるようになった。

桜文は大きく分ければ、枝に咲く様、桜花、花筏や桜川など流水との組み合わせがある。西行寺幽々子の衣に使われているのは桜文様の中でも、桜散らしと呼ばれる、花を重ねたり、ちぎれた花びらを散らすなどの変化をつけたものである。『妖々夢』と西行寺幽々子の関係を表した文様である。

『永夜抄』の目を移すと、満月に雲が描かれている。月は名月のこともあつてか、秋の草花と取り合わせて使われていることが多い。

雲の文様は種類が多く、鳥と雲、鳥と花、立涌のような幾何学文様と様々な組み合わせがある。雲の文様は中国の神仙思想を受け継いだ瑞雲と、自然の一風景としての雲の二種類がある。中国から輸入された瑞雲を、日本

では靈芝雲と呼ぶ。自然の一風景である雲の文様は横になびく形で描かれる。瑞祥の意味はない。

西行寺幽々子の衣に使われている雲を確認すると、後者であると分かる。一文字雲、渦巻き雲、流れ雲と沢山の種類がある雲文様であるが、この場合は、雲が風に吹かれる様を意匠化したものであろう。



泉

母

西行寺

幽

子

『永夜抄』の八雲紫の衣を見ると、その服の中心に非常に特徴的なものが見える。日本国内では「算木文」と呼ばれるものである。算木は和算で用いた計算の道具である。しかし、八雲紫というキャラクター、あるいはこの文様が使われている中華的な服を見ると、この文様は「八卦文」と考える方が妥当である。

易と呼ばれる古代中国で考え出された占いに用いられるのが八卦である。筮竹五十本を二つに分け、陰陽を知り、卦を作る。この卦は八種類あり、乾、坤、離等々である。ここで描かれているのは「兌」と「坤」である。この二文字にはどのような意味があるのであろうか。八卦を二つ重ね、それぞれには占いの文句がある。

八雲紫に使われた二つの卦は、四五番目の卦である「沢地萃」を導く。人や物事が集まる、繁栄する時である。

一 部 集

沢地萃

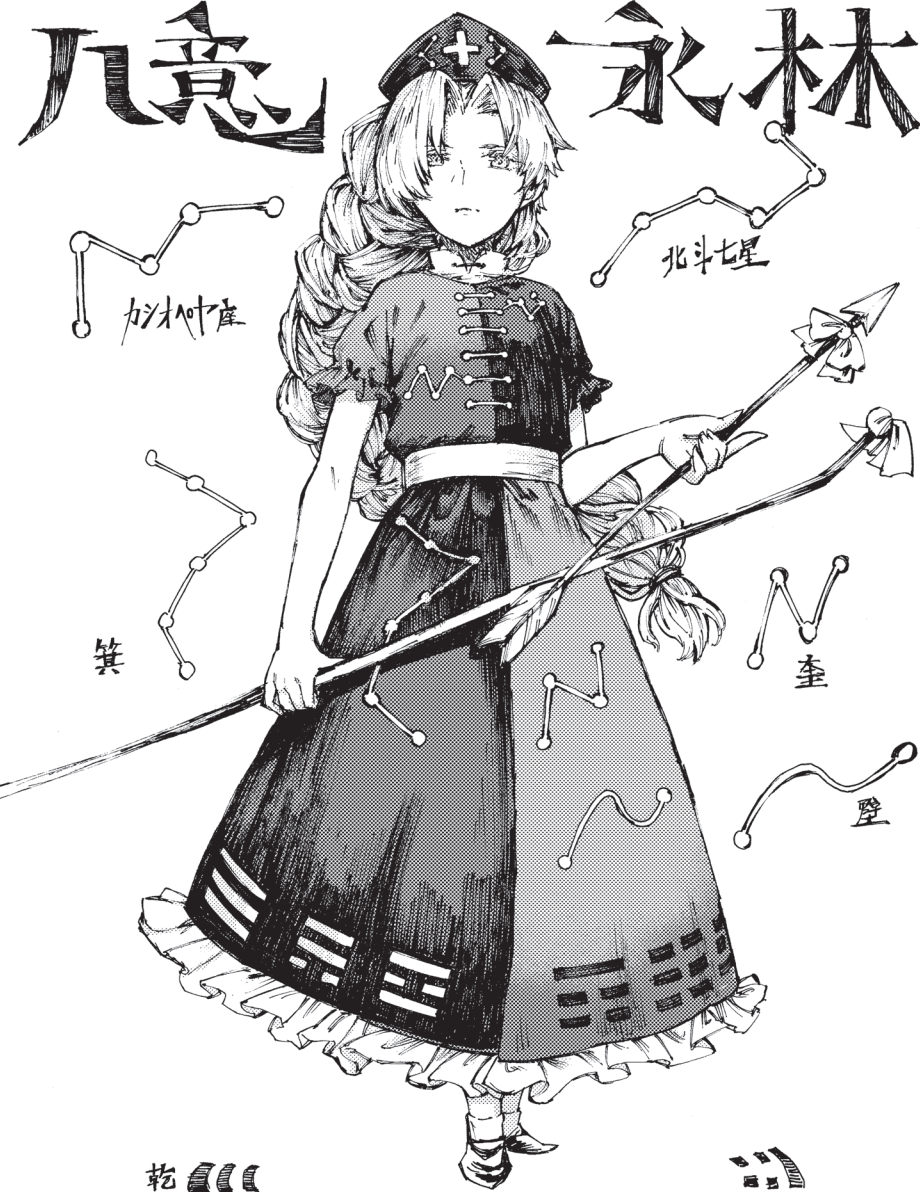


月人という種族や「月の頭脳」（『永夜抄』）という二つ名通り、彼女に使われている文様は天体に関する。帽子の織姫座に始まり、右上半身にあるカシオペア座、左上半身にある北斗七星、右下半身の箕、左下半身の奎・壁となっている。

スカートの裾部分には八卦もあり、右半身には乾・巽・離が描かれており、左半身には艮・坤が描かれている。これらの八卦は、五行にも対応しており、それぞれ、水・金・土・火・木となっている。

月という場において、八意永琳という存在がどのような立場にあり、人々からどのような眼差しを向けられているのか文様から明らかであろう。

八竟 永林



乾 ☰

巽

離

坤 ☷

艮

蓬萊山輝夜の衣には幾つもの物が描かれている。月に始まり、雲、桜、竹、紅葉、梅、蝶。桜と雲については西行寺幽々子の頁（二六頁）の説明に譲り、他の文様について意味と由来を考える。

月が描かれているのは『竹取物語』や蓬萊山輝夜の出身が月であることが関わっているであろう。桜、竹、紅潮、梅の四種は四季を表していると考えられる。いずれも文様として意匠化されたのは古い。竹と梅については吉祥の文様でもある。松を加え、松竹梅文や歳寒の三友と呼ばれる文様である。

『永夜抄』ではキャラクター名前のところに、蝶が描かれているがこれについても書いておく。蝶が文様として登場するようになったのは平安次代中期頃であり、それまでは添え物として扱われていた。卵から青虫となり、脱皮を重ね蛹になり、やがて蝶になり舞い上がる。不死不滅のシンボルとして武士の紋章にもなっている。



蓬

葉山

輝夜

スカートをみると薄っすらであるが、落葉と流水が見える。水の流れの蛇行した線に色々なモチーフを配し、様々な文様が作られた。流水自体も、人生の浮き沈みにと例えられた。

流水に落葉を加えると全く異なった文様を意味する。

竜田川文である。奈良県生駒郡を流れる川の下流部、大和川と合流点の下部を竜田川と呼んでいる。この両岸には楓が多く、紅葉の名所として古くから有名であり、『古今和歌集』にも数多くの歌が収められている。『百人一首』にもある、『ちはらぶる神代きかずたつた川からくれないに水くくるとは』という和歌はとりわけ有名であろう。

江戸時代では名所としての竜田川を表すと同時に、和歌の風情を巧みに意匠化した文様も数多く見られる。



吉田川文

日熊勇儀

スカートに注目してみると、微かに花の模様が描かれているのが見える。薔薇である。美しい花容で花色、香りが素晴らしくギリシャ時代から愛され栽培されている。アフロディーテの誕生と共に薔薇が創造された、神酒が零れて薔薇になった、ローダンテという娘が薔薇の木となった……といったふうに、薔薇とギリシャ神話の関係は幾つかある。そうして登場した薔薇は十五世紀トルコのイズニークを中心に陶器の文様として写實的に描かれることとなる。

また中世キリスト教世界では百合と同様に聖母マリアに捧げられた。棘のない赤い薔薇は、聖母の慈愛を象徴した。聖母は薔薇の咲き誇る庭、あるいは薔薇の垣根に囲まれた庭に座して描かれることがあった。すなわち、『庭』という子囲まれた空間は聖母の処女性を示し、『薔薇の園』は天国のイメージとして用いられたのである。中世キリスト教世界でそのような意味で用いられた薔薇であるが、十八世紀以降は絹織物や磁器のモチーフに取り上げられるようになった。

色や本数で意味が変わる薔薇であるが、さとりのス

カートに描かれてる薔薇はピンク色。花言葉としては、『しとやか』や『上品』や『感銘』といったものがある。



古明地觉

古明地さとりと同様に、古明地こいしのスカートにも似たような花が描かれている。薔薇とよく似ているが、ラナンキュラスという別の花である。光沢のある花卉を幾重にも重ねた豪華な花である。

葉と茎の違い、ラナンキュラスは蓬の葉のような形をしている。茎の色はラナンキュラスの方が薄く、薔薇とは違いラナンキュラスの茎には産毛がある。萼にも産毛があり、厚みがあり、丸みを帯びている。薔薇は木であり、ラナンキュラスは草という違うもある。

こうして違いを並べ、豪華な花と表現したが、文様に使われることは薔薇と比べて遥かに少ない。キリスト教と関連付けられた薔薇、百合といった花々が描かれることが多いためである。

その由来も調べてみたが、これも薔薇同様にギリシャ神話にあるらしく、ラナンキュラスという青年の悲恋にあるらしいが定かではない。

ラナンキュラスの花言葉は『とても魅力的』、『美しい人格』、『名声』、『名誉』といったものがある。

彼女の上着にも鈴蘭という花が描かれている。これも

文様として描かれていることは少ない。春の花なのであるが、春となると桜や梅といった花々が描かれることが多かったであろう。『幸せの再来』といった花言葉がある。

古明地一花



今ではチェックや市松模様として知られる、姫海棠はたてのスカートの柄であるが、この柄は江戸時代の歌舞伎役者である佐野川市松が用いたことで流行った。

元は「正方形の石を交互に並べた形状から石畳文という平安時代には公家の正装にも用いられるようになり、有職文様となり、『霰文様』と呼ばれることもあった。

姫海棠はたての市松文様のスカートには薄っすらとであるが花が描かれている。特定は難しいが、おそらく、ヒメカイドウであろう。ズミとも呼ばれ、樹皮を煮出し黄色の染料に用いるところから来ている。花言葉は『追憶』。



姫海棠
はたて

縞柄の一種である格子縞が、秦こころの服には描かれている。横縞と縦縞との組み合わせで、細い四角な木を組み合わせた建具を格子戸というが、この格子戸から名付けられている。洋服地のチェックと同じ図柄である。

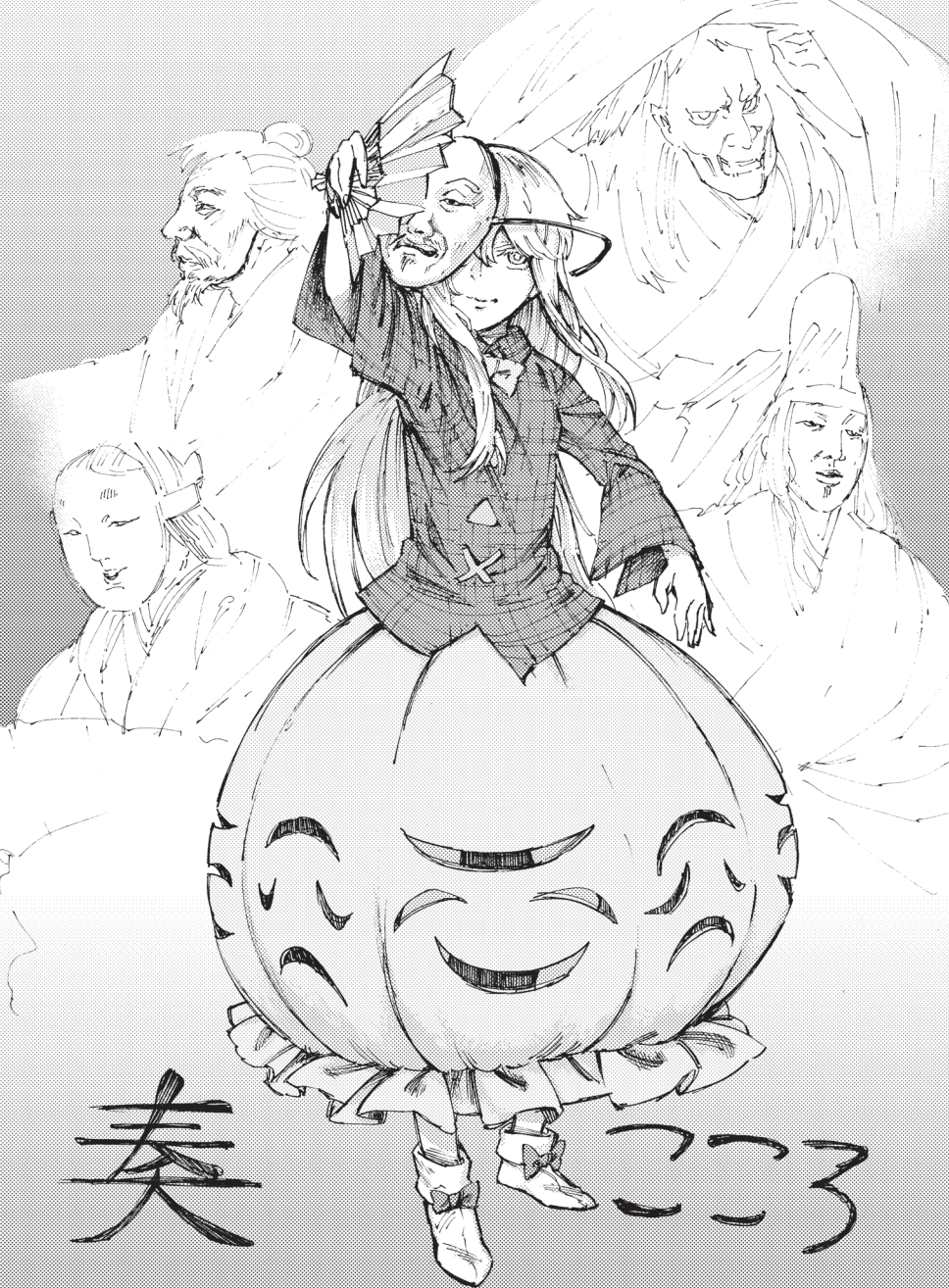
細かい格子模様の微塵格子、碁盤の目のように縦横の幅が同じ格子の碁盤格子、縦横の幅が同じ格子で小さめの柄を意味する小格子、二本筋の二筋格子、三本筋の三筋格子、四本筋の四筋格子……といったように多くのバリエーションがあるが、太い柄は威厳の良さを、細かい格子は上品さや粋を表した。

といった格子文様は、江戸時代中期から地産業としてい綿織物を奨励する藩が多くなり、縞物は庶民の日常着として欠かせないものとなった。

庶民の日常着として欠かせないものになった格子文様であるが、能装束に用いられることもあった。様々な用途に使われた厚板という小袖があり、白、無地、色なし、色入り、大格子や中格子や小格子といったようにいくつもの用途に分けられた。主として男性の着付けに使われたが、荒神や鬼神の類の役、年配の女性の上着にも用い

られた。

ということを踏まえると、秦こころの服飾に格子文様が描かれているのは洋服地のチェック柄とは違った意味があることが明らかであろう。



奏

333

一寸法師の末裔である彼女の姿を見た時、真つ先に目に飛び込んでくるのは、頭に被っている椀であろう。この椀をよく見ると、二つの模様が描かれていることに気付く。一つは月。月を象った文ということもあり、月象文と呼ばれる文様である。もう一つの紅葉と合わせ、秋の季節を定番となっている文様である。紅葉の文様は、その形が鶏冠に似ていることから、立身出世の意味することもある。

立身出世ということを考えると、彼女の服に描かれている蜻蛉も同じ意味を持っている。蜻蛉は「かちむし」や「勝軍虫」とも呼ばれ、一直線に飛ぶ姿に不転退の精神を見出し、武士の武器の文様にされることも多かった。服に注目すると、蜻蛉の他に秋の七草の一つである芒が描かれているのも見える。芒は中秋の名月の際に飾ることもあり、椀に用いられている月と深い関わりがあることは明らかであろう。

更に服に見ると、鹿の子斑という白い斑点もある。鹿というと秋の文様であるが、そこには『古今和歌集』の「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿のこえきく時そ秋はかなし

き」という思いが流れていることだろう。

衿の所に目を遣ると、波を扇状の形で描いている幾何学模様があることに気付く。青海波と呼ばれるこの文様は、エジプトやペルシアのみならず世界各地で見られ、三角の文が山や波の形へ発展したのである。日本国内でも古墳時代の埴輪にも用いられ、古くから用いられている文様である。この時代は「波」や「水」といった意味で青海波が用いられていることはなく、連続模様の一つとして考えられていた。ただの波模様であるこの文様が、青海波と名付けられたのは同名の雅楽の舞曲からと言われている。

この文様は吉祥文様でもある。大海原を意味し、海の無限の広がりの意味している。また、扇状というのも、末の方に広がる吉祥である。

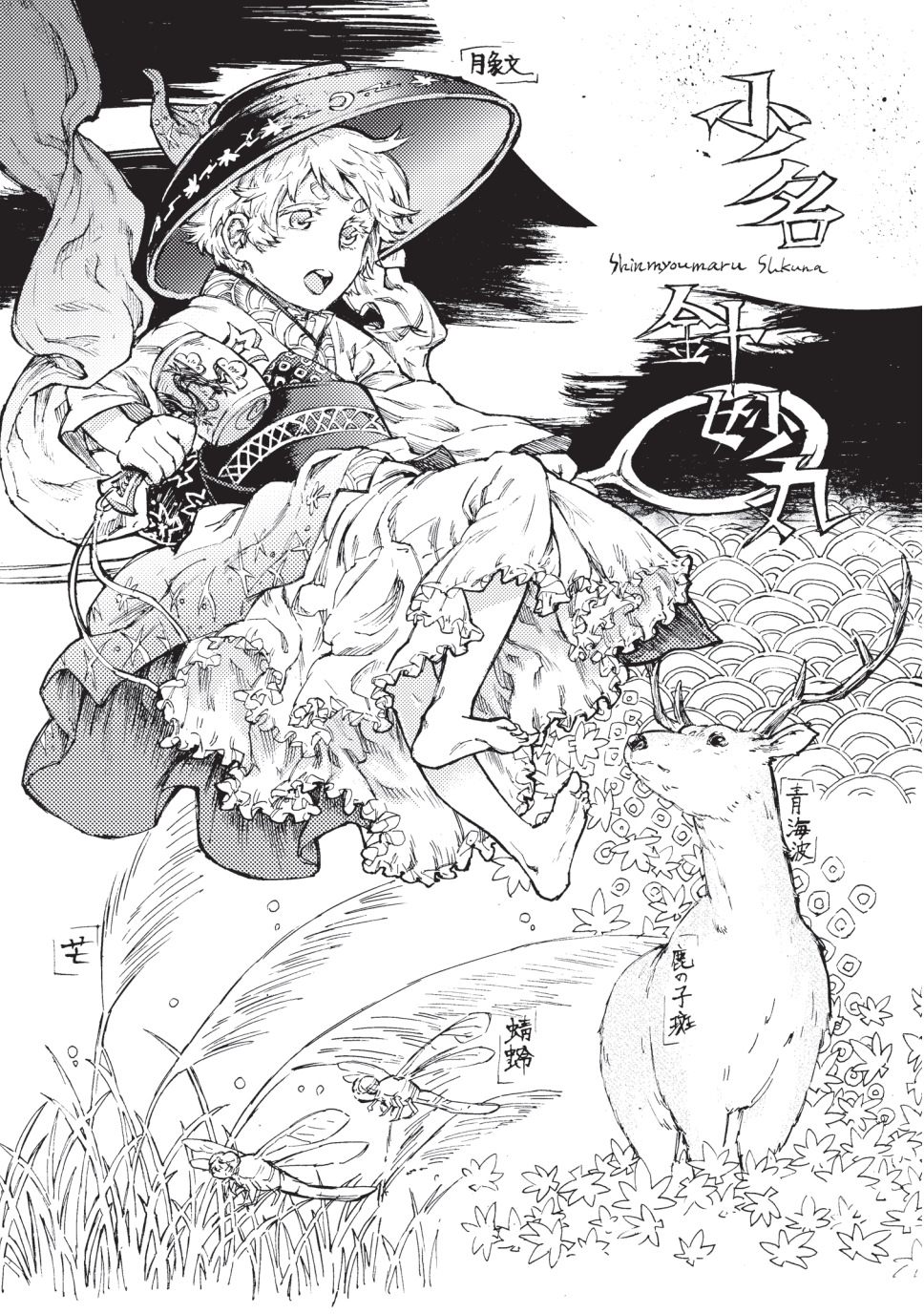
少名針妙丸に用いられている吉祥は、彼女の持つ打ち出の小槌にもある。松だ。古くから、冬にも常緑を保っていることから常盤樹や吉祥樹と呼ばれている。また、門松に代表されるような、神を招く依り代、歳神を待つという意味もある。

月象文

小名

Shiroyomaru Sukuna

金
天



青海波

鹿の子斑

蜻蛉

芒

黄色い羽織に描かれている花が非常に特徴的であるが、この花は一体何なのであろうか。花をよく見てみると、椿が考えられる。椿の品種には、乙女椿というものもあり、阿礼乙女からの連想としてこの花が選ばれたのかもしれない。あるいは椿の花の散り方に、御阿礼の子の短命を思い描かせたのかもしれない。この花は桜や梅のように花弁がバラバラに散るのではなく、萼と雄しべだけを木に残して、花弁ごと落ちる。死を連想させる花と忌み嫌われることもある。

しかし、椿には古来より悪霊を払う力があると考えられ、神事には欠かせない木であった。椿の花の散り方がまるで首が落ちるようだと忌み嫌われることもあるが、松や竹に代表されるように冬も枯れない常葉樹は吉祥の木とされていた。



替



稗田
興阿

後書き

この本は、昨年の秋頃、求代目の紅茶会当日にうーみん氏が、『東方文様本』と話されたため、テキスト担当を名乗り出た次第です。普段は小説を書いており、このようなテキストを書くのは今回が初めてでしたので非常に難しかったです。いくつかの資料に目を通しながら、幻想郷の少女達の服と文様を見比べる日が続きました。間違いがないように注意を払いましたが、間違えがあれば申しわけありません。テキストが遅くなっても待っていただいたうーみん氏にお礼申し上げます。

参考文献と一言を左記に記しておきます。

『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所

非常にお世話になった一冊。日本と中国の文様の歴史があり、多種多様な文様を紹介しながら、その文様の意味や由来も教えてくれた一冊です。

『ヨーロッパの文様事典』視覚デザイン研究所

『日本・中国の文様事典』のヨーロッパ版。西洋の文様のツールを紹介しながら、その文様の意味と由来を教

えてくれた一冊。

『明治・大正・昭和に見る「きもの文様図鑑」』平凡社

先の二冊は文様の歴史について詳しく教えてくれましたが、この本はタイトルにある通り明治から昭和までのきもの文様について教えられた二冊。『日本・中国の文様事典』で知った文様を更に深めようとした時に読みました。フルカラーですので、眺めていても楽しい一冊です。

『ヨーロッパの装飾と文様』パイインターナショナル
作者の装飾文様の情熱が伝わってくる一冊。縞や格子や三角や四角といった文様についての所感は見事なものでした。フルカラーであり、ヨーロッパの装飾文様の美しさを知れた一冊でした。

『キモノ文様事典』淡交社

着物の文様を五十音で並べた一冊。他の本では僅かしか触れられなかった文様の意味と由来について書かれていたため貴重でした。白黒の文様事典です。

『江戸伝統文様事典』河出書房新社

江戸期の文様について書かれた一冊。が、他の資料のように、その文様の意味や由来が書かれていなかったためそこまで活用しませんでした。白黒の文様事典。

『中国文様事典』河出書房新社

中国の文様に絞った事典。伝統的な文様は少なく、中国の民間文様を中心とした白黒の事典でした。

『文様博物館』マール社

他の文様事典が歴史や文様の移り変わりを中心としておりましたが、この資料はヨーロッパを中心とした国々の特徴的な文様について紹介しているフルカラーの文庫本。

『世界装飾図』マール社

十九世紀フランスのデザイナー、オーギュスト・ラシネの『世界装飾図集成』を短くまとめた文庫本。『文様博物館』同様、世界各国の文様について紹介しています。

二〇一六年八月上旬 近藤貴弥

あとがき

文様讀本をお手に取っていただきありがとうございます。私の軽い一言から始まって、近藤さんに文章を書いて頂いて完成させることができました。

お楽しみ頂けたら幸いです。

二〇一六年九月上旬
うーみん

とうほうもんようどくほん とうほう こんどうたかや つか もんよう いみ ゆらい
東方文様讀本 東方キャラクターに使われる文様の意味と由来

初版 2016年10月9日

原作 東方 Project

印刷 ちょ古っ都製本工房

発行・文章・編集 近藤貴弥 (出藍文庫)

連絡先: stkk7.920521@gmail.com

画 うーみん (狼疾人)

連絡先: wominwomin5@gmail.com

Twitter: [wominwomin5](https://twitter.com/wominwomin5)

本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。
